

ほな、い歴史通信

第14号

2000. 3. 1

まちづくりの歴史の視点を

—— 郷田 實著『結（ゆい）の心』から学ぶ ——

今年の一月四日付日本経済新聞に、あるアンケート調査の結果が掲載されました。その調査とは、新しいミレニアムを迎えて様々な課題に直面する全国の市町村長に地域社会の未来図を展望してもらおうというものです。いろいろ興味深い内容が盛り込まれていましたが、そのなかで、首長たちに二一世紀のまちづくりのモデルにしたいと思われる市町村のランキングが目につきました。第一位が大分県湯布院町、第二位宮崎県綾町、第三位北海道ニセコ町、第四位静岡県掛川市、第五位大分県大山町といった具合です。綾町が第二位にある、多少の驚きとさもありなんとの思いをもってその記事に見入りました。

仕事柄、県内外の市町村を訪ねる機会が多いのですが、今私が一番訪れてみたいのが、この綾町です。かつて、「夜逃げの町」あるいは「人の住めない町」といわれた過疎の町が、「照葉樹林都市」「有機農業の町」実現を目指してまちづくりに取り組み組んだ結果、今や多くの首長が目標とする町に変身しました。町は変わる、町は変え得る、このことを見事に実証したのが綾町だと思います。その今日をあらしめたのが、一九五四年に

助役に起用され、六六年からは六期二四年間にわたって町長の椅子にあり文字通り牽引役を果たしたのが郷田 實さんという方です。数年前にある講演会でお会いし、酒を酌み交わしながら深夜まで議論したときの印象が鮮明に残っています。

一昨年の十二月、その郷田さんが町長時代のまちづくりの軌跡を綴った著作『結（ゆい）の心』（ビジネス社刊）を刊行されました。この本からは、公民館を拠点にして住民の行政参加意欲を喚起し、住民とそれこそ烈しい議論を積み重ねながらまちづくりを精力的にすすめて今日の綾町に結実する過程が理解できるだけでなく、まちづくりを考え、それに取り組む際の数多くのヒントを学ぶことができます。

一読して、とくに強く脳裏に刻まれたのが「比較異」という考え方です。つまり、他と比較して異なるものを、しかも「近未来に広く共感が得られるようなもの」をまちづくりの核にしようとの考え方で、郷田さんはこうも述べています。この発想は、「自分たちの町や村にかつてあって、いまは眠っている、忘れ去られているものを思い出させてくれます」と。

周知のように、地域のもつ「異」を消し去り、合理性と効率性を最優先させて画一化の道をひたすら歩んできた、これが明治維新以降今日に至る日本の成長過程でした。しかし時代は、画一から独自性を競う方向へと大きく変わりつつあります。かつてあった祭り、忘れ去られてしまったものづくりや暮らしの技、食文化等々地域性を色濃く反映した地域の諸相を掘り起こし、再評価することが大事な作業として求められています。言い換えるなら、これは地域の歴史を明らかにする作業には欠かせません。失われた「異」を発掘して光を当て、それをまちづくりの糧として活用する。「比較異」の考え方は、まちづくりに歴史の視点が不可欠であることを示唆しています。（斎藤）

【資料紹介】 内山逸峰『東路露分衣』から

私たちの楽しみの一つに旅行があります。

江戸時代も元禄年間ごろになると社会秩序が整い人々の生活が安定してきました。すると、経済的にゆとりがあり時間に余裕の持てる人は、自分のほんの身の回りから少し離れた、遠く離れたところへも目を向け足を運ぶようになってきました。

当時、旅の目的は神社・仏閣への信心が大部分でした。お伊勢参り、金比羅詣、あるいは四国八十八カ寺巡礼の旅、西国・坂東三十三カ所札所巡りなどと目的ははっきりしていました。

それが時とともに、江戸・京都・奈良・大坂などの賑やかどころを見て回ったり、富士登山をしてみたり、あるいは浅草観音参りのついでに江戸の吉原へ行ってみたりとだんだん娯楽的要素が大きくなってきます。

しかし、このような風潮のなかで、一部の人は旅を愛しながらも別の生き方を求めた人もいました。平安、鎌倉期の西行や宗祇、あるいは江戸時代に俳句行脚をしながら各地に足跡ののこした俳人芭蕉等に共感して、いわゆる風流とか漂泊の旅に憧れてそれを意識して全国各地を歩いた人もいました。

大子町を訪れた内山喜左衛門逸峰はまさにそのような旅人の一人です。逸峰は越中国（富山県）宮尾村に生まれ、農業の傍ら村役を勤め、また一方では京都の公家に和歌を学びました。家業が安定して家督を息子に譲ると、還暦（六十歳）を迎えた翌宝暦十一年（二七六）から国内各地を旅し和歌を詠みながら紀行文をつくり安永九年（二七八〇）八十歳で亡くなりました。

今ここで紹介する『東路露分衣』は逸峰六十四歳、明和元年

（二七六四）七月から十二月にかけて北陸・東北・関東を旅した時の大子地方に関する部分です。

現代風に訳しながら本文を読んでみましょう。

その日は植田村（埴町）の吉成仁左衛門の所へ立ち寄って暫く休んでいたら、ゆつくり泊まっていたらと勧められて泊まることになった。（中略）無理に引き止められるまま三泊ほど世話になった。

それから出発して下野宮まで行った。ここは陸奥と常陸の国境だということである。その夜は常陸国久慈郡池田村の桜岡立啓という医師の所へ、植田村の吉成氏からの紹介文を持って行って泊まらせてもらった。この家の主人に歌を所望まれたのでさくらおかという苗字を折り込んで一首詠んで贈った。

冬ながらここの内の山桜岡辺の花やいつも咲くらん
翌朝、ここを出発して下金沢村の吉成元亀という医師を訪ねた。この人の所も植田村の吉成氏の紹介である。主人が歓待してくれ泊ることになった。その夜、主人が絵を見せてくれた。見れば絵の上部に鷹が飛び、下の方には梅の花が咲き零れんばかりに描いてあった。そこで、

とりひしぐわざはつはもの此花をめぐる鷹や文好むらんと詠んで主人に贈った。

次の日は、下野国竹部村（馬頭町）の修験大泉院に泊まった。翌日はあちこち見て回り、その夜は馬頭宿の飯塚家に泊まることになった。この人の所は久慈郡上金沢の塚田六郎兵衛からの紹介である。（以下一略）・・・というものです。

これを読んで今の旅行マニアはどう考えるであろうか。（裏）

義務教育の月日は四十年まで

六・三・三・四、今はこのうち、小学校六年間と中学校三年間が義務教育となっている。いわゆる六・三制といわれるこの制度は戦後の教育改革で、「学校教育法」を制定し、昭和二十二年から始まった。

明治以前は武士は主に藩の学校で、農民や商人の子弟は寺子屋などで学ぶのが常だったが、義務教育制度はなかった。

明治維新以後、「欧米に追いつけ」を合言葉に、学校教育を重視するようになってきた。明治五年「学制」を發布し、教育の機会均等を図ったのである。しかし、校舎も無く、教師も足りず、何を教えれば良いのかもわからず、教科書も無いという状態だったから、最初はお寺や、大きな民家の一室を借りて、江戸時代の論語などを教えたり、アメリカの教科書の直訳ものを使ったりしていた。各村では、学校を造る費用のほか、教師の給料や学校の経費などの負担に苦しんだ。学校などもってのほかと一揆に発展した村さえあった。

明治十九年には「小学校令」により小学校は四年生までとなり、同三十三年小学校令を改正して義務教育とした。学年毎に試験があり、合格しない者は、もう一年同じ学年で勉強する。落第生である。なにしろこの頃の試験官は、よその学校の先生が来るのでごまかしは利かない。全くの実力主義だった。だから、毎学年が終わる度に、修了証書を買う。「小学校第一学年の課程を修了したことを証する。」という具合だ。四年生が終わると「小学校の課程を卒業したことを証する」という卒業証書を買って、義務教育は終わりということになる。

世の中が進歩するにつれて、教育は益々重要となり、明治四十年には六年生までに義務教育を延長した。この頃になって就

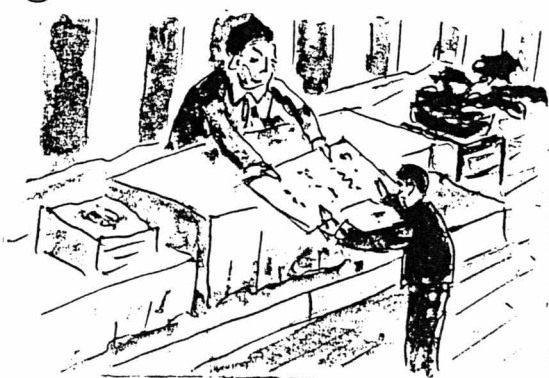
学率は向上し、ほぼ百パーセントになって来た。就学督促に力をいれた結果である。明治・大正・昭和となるに従い高等科に進学するものも多くなってきた。

昭和初期、戦前の卒業式はまだ明治の名残があった。

卒業式は修了式を兼ねて「昭和〇〇年度〇〇尋常高等小学校卒業式並びに修了式」という具合である。まず各学年修了証書の授与が行われる。これは代表が出て受け取ってくる。卒業証書も同じ様に代表が受け取る。次は賞品の授与で名前を呼ばれる。行いの良かった者は「操行善良」、勉強ができた者は「學術優等」、無欠席者は「皆出席」と言う賞が貰える。「操行善良・學術優等・皆出席」と三つ揃って貰えれば最高、優等生というわけだ。修身、国語、算数の教科書などが賞品だった。その頃は、教科書は自分で買う事になっていたが、たいてい兄が使った物を弟が使うというようにしていた。だから教科書はていねいに使ったものだった。

昭和十六年、小学校は国民学校と改正され、戦時教育が充実された。この年の十二月八日に太平洋戦争が始まったのである。昭和十九年から高等科も義務制にし、義務教育八年の予定で法律まで改正したのであるが、戦争が激しくなり、延期せざるを得なかった。

戦後になって、六・三制が実施され、ようやく義務教育は九年間となったのである。(石井)

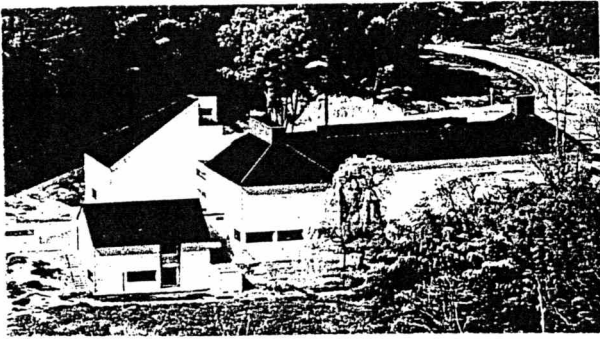


【資料館めぐり】

三春町歴史民俗資料館を訪ねて

三春は、福島県中東部、田村郡の地名。阿武隈山地の西麓に位置する。戦国時代は、征夷大将軍坂上田村麻呂を祖とする伝えられる田村氏が居住、仙台の伊達政宗の正室愛姫のふるさとです。江戸時代は、秋田氏の城下町で、馬を産し、養蚕・タバコ栽培が盛んでした。明治初期の自由民権運動では、西の板垣退助らの高知に対して、東の河野広中らの三春といわれました。

昭和五十八年四月、室町水墨画の巨匠雪村の里がえり展でオープンを飾り、2年目は「みちのくの古人形——三春人形とその周辺」の特別展を開きました。



そのような豊かな歴史と風土をもつ三春に郷土博物館基本構想起草委員会が設置されたのは昭和五十二年五月です。昭和五十六年一月、資料館建設基本方針および展示基本設計委託、同時に資料調査員を委嘱して（20名）、資料所在調査にはいりました。二月、公民館内に資料館準備室設置、三月資料館開設準備会議設置（19名）、五月、国と県に補助金交付申請して、七月建設工事着手しました（昭和五十七年三月完成）。十二月展示基本構想策定、翌五十七年三月収蔵資料確定、六月資料館条例制定、八月、十月、収蔵資料搬入。昭和五十八年二月資料館運営協議会

設置（10名）、二月、三春町歴史民俗資料館友の会発足、四月、開館記念特別展「雪村——三春への道」および自由民権記念館開館式を行い、以来十七年を経ています。

館内は、常設展として「きのうの三春（民俗）」で、三春駒、職人の道具、蚕物商の店先、農家のいろりばた、信仰と民俗芸能などの展示。「はるかな三春（歴史）」として、縄文人の祈り、田村氏の三春築城、三春と雪村、三春と秋田氏、近代の夜明け。自由民権記念館では、自由民権発祥の地として県内はもとより東北の民権運動をリードした多くの民権家の業績を顕彰しています。さらに、企画展示室があり、桜の季節（樹齢千年の滝桜）の特別展や部門展を開いています。

学芸員の方に、館内ばかりでなく、収蔵庫まで案内していただき、資料館建設について、有意義なるアドバイスをうかがいました。資料館という施設があるがために、三春地方の歴史や風土を学ぶことができ、地域の人々にふるさとへの愛着と勇気を与え続けていることを教えられました。（野内）

編集人

斎藤典生（茨城大学人文学部）

野内正美（茨城県立歴史館）

石井喜志夫（元教員）

小澤園彦（太子町教育長）

吉成英文（太子町社会教育課）

井上和司（太子町税務課）

編集発行

遊 中 文 の 会

太子町立中央公民館歴史資料室発行
久慈郡太子町大字池田二六六九番地
電話 三九三三

昭和五十七年三月